

先週21日には、社会を明るくする運動の中学生の意見発表、そして23日には中学生議会と、このところ生徒たちの素晴らしい姿を立て続けに見ることができました。熱い思いをもって、堂々とあるいは切々と語る生徒たちの姿からは、未来を切り拓く逞しさが窺われました。各学校における指導の賜物と感謝いたします。

本日は、二点についてお話しします。

一点目は、教員不足についてです。教員不足の問題は、今や全国的に深刻化しています。愛知県も事態を重く捉え、常勤講師を対象に臨時免許状を付与したり、来年度からは教員採用試験の前倒しや大学三年生の受験も導入して、採用数と教員資質の確保を図ろうとしています。しかし一方で、県は、国に一年先行する形で35人学級の拡大を継続しています。また、県立中学校の発足も市町村の教員不足への影響が懸念されています。さらに、西三河地域では、中核市による独自加配や32人学級の実施が、教員不足を深刻化させています。

現状、本市小中学校においても、新年度当初の県の配置時点から定数を満たしていません。担任は、校務主任が兼務するなどして充足しているものの、やむを得ず少人数指導等を縮減したり、産休補充の講師もなかなか見つからず、苦慮しています。その分、不足している学校では、先生方が授業や校務分掌を余分に受け持って頑張っています。教育委員会としては、常時、常勤講師の発掘登用に腐心していますが、西三河全域は言うまでもなく、隣接する東三河地域や尾張地域においても余剰人材はなく、手の打ちようがない苦しさです。当面は、不足分に非常勤講師を充てて、少しでも緩和できるように努めるとともに、学校業務の軽減を促していきたいと考えています。また、来年度の教員配置の要求にあたっては、年度当初の定数を確実に充足するように、今まで以上に強く県に働きかけていきます。

二点目は、文化財の活用についてです。昨今、文化財は、しばしば観光振興の目玉として重宝され、地域経済の活性化に寄与しています。歴史的遺産の豊かな本市においても、交流人口を増加させることを狙った施策が進められており、魅力あるまちづくりに一役買っています。

一方、文化財には、市民に郷土愛や矜持を醸成する効能も有しており、この内的な力をいっそう重視すべきと考えています。このような文化財の精神的価値を掘り起こし、市民に周知していくことが、経済優先の志向に偏りがちな、また道徳性の低迷が心配される現代において、社会の健全性を維持し、不透明と言われる未来社会における羅針盤となる、極めて重要な役割を担うのではないかと思います。「温故知新」は、言い古された言葉ですが、文化財活用の真意はそこにあると思います。

教育面から見てみますと、古の教えが有効に機能している例は少なくありません。顕著なものとして、「ならぬものはならぬものです」で夙に有名な、会津日新館の「什の掟」のような、市民全体のモラル形成にも資する伝統は、うらやましい限りです。本市にも市民皆の合言葉になるような金言がないものかと、吉良家礼法や大給松平家の家訓、修道館や済生館の校訓等を紐解いていきたいと思っています。